みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

サンゴ礁の島サタワル

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 須藤, 健一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5164

サンゴ礁の島サタワル

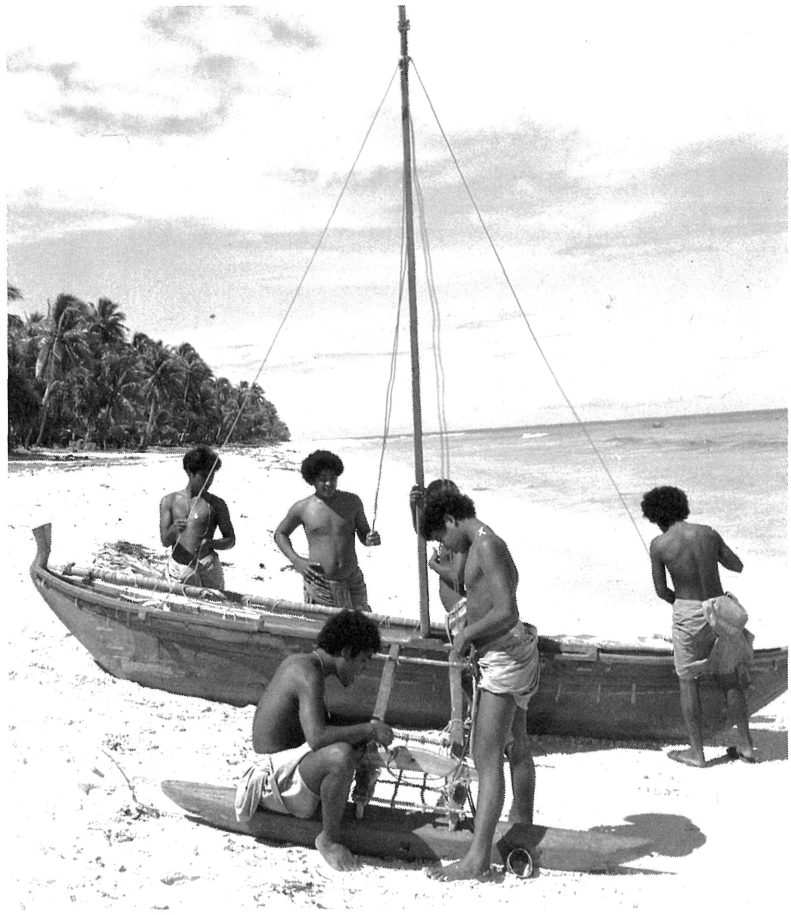
須藤健一

カヌー船団で出漁

ミクロネシア……グアム島の南に東西千キロにわたってサンゴ礁の島々が連なっている。サタワル島は、そのなかでも、周囲六キロ、海抜七メートルの小さな島である。この島の人々は、タロイモやパンノキの実を主食とし、動物性食糧を魚やウミガメに依存している。三か月に一度、島々を巡航するコプラ収集船が来島するほかは、外洋航海用のカヌーが外界と接触するための唯一の交通手段となっている。

われわれの目には〝南国の楽園〟と映る島の人々の生活は、決して安穏としたものではない。サンゴ礁の島のため地味に乏しく、食糧資源に恵まれないからである。タロイモは、湿地で栽培されるが、イモ田に開墾できる場所も限定される。パンノキは、一年のうち半期しか結実せず、しかも降雨量の多寡によって収穫量が左右される。これらの作物は、五百人の島民の口をうるおすのには十分でない。島の

漁業資源も、海のただ中の島のわりには、豊富ではない。サタワル島は、卓礁で裾礁が発達しておらず、島のまわりでの漁獲に多くを望めない。そのため、百キロ離れた無人島での漁撈活動が大きな比重を占める。三、四隻とカヌーの船団をくんで無人島へ出かけては、魚介類やウミガメを持ち帰るのが、



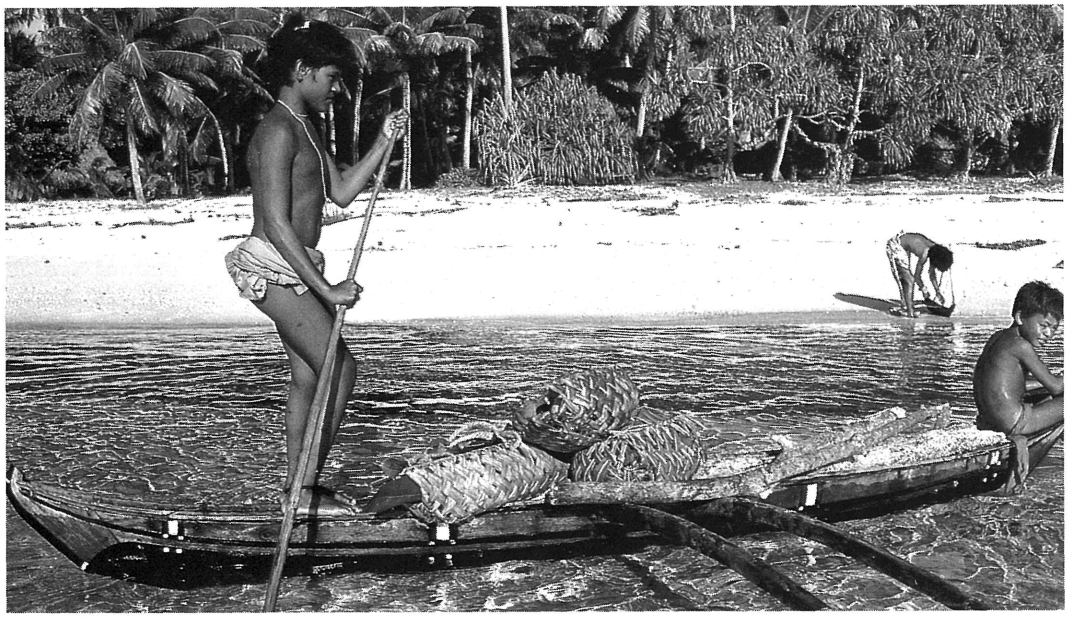
▶石蒸し用のサンゴ礫を海岸でひろい集めて運搬する子ども。女の子は四、五歳になると母親と一緒にイモ田へ出かけたり、薪を集めたりして仕事や土地の境界をおぼえる。◀男の子は十二、三歳になると操船の技術を修得し、小型帆走カヌーで島の周囲で引き釣りを行う。

男の重要な仕事である。

しかし、北東からの貿易風が強くなる十月―三月までは、海が荒れ、出漁の機会が極端に少なくなる。この時期は、ちょうどパンノキの実の枯渇するときでもあり、島の食糧事情は、目をおおうばかりである。男たちは、この期間に、他島への交易の航海にさかんに出かける。サタワル島の生活は、女が作物を栽培し、男が漁撈と航海に従事するという男女間の分業のもとになりたっている。とくに、大海原をかけめぐる航海者こそが、島社会においてもっとも尊敬される男なのである。

十歳ころから機織り

このようなサンゴ礁の島の生活環境は、子どもの世界にも大きな影響をあたえる。女の子は、四、五歳になると母親に連れられてイモ田へ出かけ、タロイモの植えつけや除草を手伝い、土地の所在を教えられる。十歳ころからは、機織りの技術の習得が始まる。初月経があるまでに、腰布の織り方を身につけなければ、一人前の女とは見なされない。この布は、一人前の女であることを象徴する衣服としてだけでなく、島の〝貨幣〟や他島との交易品として貴重である。また、サタワル社会は、母系制社会であ



手こぎカヌーで島の遠隔地から荷物を運搬するのは、男の子の仕事になっている。

全長九メートルのこのカヌーは、他島への航海や漁撈活動に使う。八人が乗りこめる。

り、イモ田やココヤシ畑が母親から娘へと相続される。女の子たちは、それらの土地にまつわる話、一族の起源や祖先の伝説、ほかの島にいる同族との系譜関係などを覚えなければならない。

子どもの一日を観察していると、女の子が友達と連れだって遊ぶ姿をほとんど見かけない。朝起きると海での水浴の帰りに石蒸し用の地炉に使うサンゴ礫（れき）を家まで運ぶ。タロイモ田やココヤシ畑からは、イモや薪をかごにつめて運搬し、それから、コプラを削ったり、イモやパンノキの実の皮をむいたりして料理の手伝いをする。森や田んぼへ行かないときは、機の傍らで腰布の織り方を習う。

女の子にくらべると、男の子は、十歳前後までのんびりと過ごす。四、五歳になると友達と干潮の礁湖で泳いだり、魚つきのまねごとをしながら海に親しむ。七歳くらいからは、裾礁まで出かけて魚を釣ったり、父親や兄たちがとった魚の運搬役となる。そして、十歳になると〝島の男〟に不可欠な諸技術の本格的な伝授が始まる。ココヤシの繊維でロープをなったり、ヤシの木に登って実をとったりする方法や、海へ出ては、突き、追い込み、筌（うえ）などの漁法を徹底的に教えこまれる。また待望の遠洋航海に連れて行ってもらえるのもこのころからである。航海

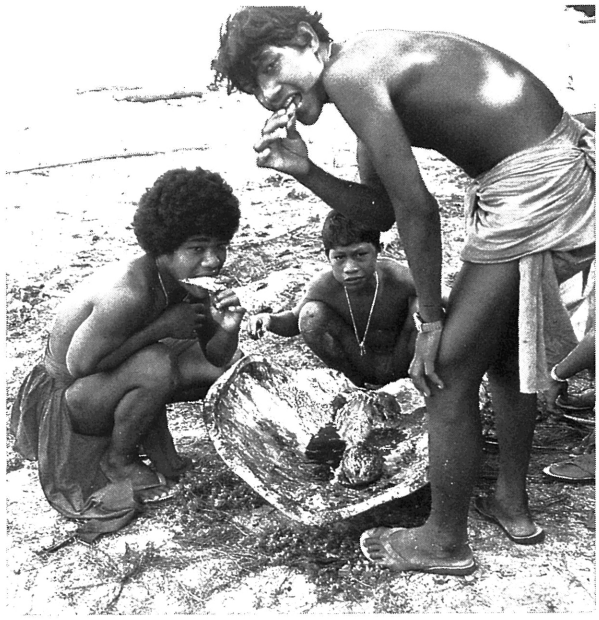
者である父親と一緒に船酔いに耐えながら無人島へ出かけた経験をもつ子どもは、友達の羨望の的であるとともに、大人からも航海者の卵として大きな期待が寄せられる。

先祖伝来の航海術

カヌーに乗り、洋上での肉体的訓練を重ねながら、十四、五歳になると、先祖伝来の航海術の直伝である。航海術の内容は、多方面にわたり、それを体得するには多くの年月を要する。サタワル社会で一人前の男になるのは、前述の諸技術を習得したとみなされる、十八、九歳ころである。しかし、一人立ちできる航海術を身につけるための伝授は〝男〟になってからも続けられる。

父親や母方のオジについて、航海に必要な多くの星を覚え、それらと方位や周辺の島の位置関係を把握し、さらに、洋上でのカヌーの位置を知る方法やうねりと波から針路のわりだしかた、漂流したときの方位の探求法を習う。この私的伝授期間のあとは、島一番の航海者とカヌー小屋に寝起きして、知識をチェックされ、再度、航海術をたたきこまれる。陸上での伝授が終了すると、実技試験である。被伝授者は、自分の判断でカヌーを指揮し、数日もかかる他島への航海を試みなければならない。この航海を成功させてはじめて、航海者の仲間入りが許される。

子どものときから始まる航海者としての試練を成し遂げる男は、志願者の一割にも満たない。現在、小学校を卒業した男の子たちは、ウルシー環礁の高等学校へ行く。しかし、高等教育をうけても、航海者の道を選んで島へ帰るものが多い。かれらの航海者志向は、カヌーで大海原を果敢にのりきる男になろうという、小さいころからの願望のあらわれなのである。



分配のすんだウミガメの甲らについた肉をはがして食べる子どもたち。島の人々にとってウミガメの肉は大好物。

サタワル　サタワル島は周囲六キロ、人口五百人の小さな社会。ミクロネシア文化圏にあって、言葉はトラック、ヤップ両島の間にまたがる島々と共通。中国南部から来たモンゴロイドの人々が住んでいる。